

# 3000m. 雲上の宴会

岩井 淑

## 92.9.1

大きな三角の握り飯をどかっと置いたような形で聳え立つ巨大な岩の王国・劔岳と劔沢を挟んで対峙する別山。その山頂、2880mで宴会が始まる。

今回の山行は夏山の喧騒を避け、秋の紅葉期との狭間である9月上旬に設定した。問題なのは台風だけであった。心配された台風16号、17号ともに西にそれ、残暑厳しい都会を離れ、カラッとした空気の中、日本第3位の高山湖であり清らかな水をたたえる硯ガ池に残る雪田の端に座り込んでの酒盛りである。

水筒は雪の中に埋めた。水羊羹も埋めた。マグカップで表面の雪を取り去るとザラメ状の目にも眩しい純白の雪氷が現れる。雪田の厚さは9月上旬でも3mはあるだろう。

マグカップに半分ほどザラメ雪を取り、それにウイスキーを注ぎ込み、水で割る。ひと口飲んでみる。う〜ん、うまい。

スルメ、馬の燻製、ソーセージ、サラミ、煮魚等のつまみはウイスキーと共に次々と胃袋の中に消えていく。その分、気分はホンワカいい気持ち。雷鳥の親子が這松の中から現れる。午前中に出会った登山者は10人に満たない。山自体がとても静かなので雷鳥達も安心してエサをついばんでいる。

雄山、大汝山、富士ノ折立から真砂岳を越えて別山まで歩いてきたトレイルを振り返り、明日、アタックする劔岳を前方に眺め、実にゆったりとした気分ひたる。

快晴。ぐるり360度の展望。気心の知れた仲間5人。こう幾つも好条件が重なり合って3000mで飲む酒は実に美味しい。

今回の山行メンバーは職場の仲間である赤石沢、鎌倉、松田、小沢と私の5人である。目的地は立山三山縦走と劔岳登頂である。私自身、いつもは単独山行なのでペースも早いのだが、今回は実にユッタリしたペースで登っている。昨日の昼食も室堂平でビールやウイスキーを飲みながら2時間。それから浄土山を乗り越えて一の越山荘で宿泊。

今日はこれから別山乗越しから劔御前をトラバースして劔山荘まで2時間。劔山荘の赤い屋根はここ別山頂上から眼下に遠望できる。劔山荘から劔岳への別山尾根コースを目で追いながらカップを口へ運ぶ。

明日のルートは一般登山道とはいえ、垂直の岩壁の鎖場をはじめとして、鎖場や梯子を次々に通過し頂上を目指すので一瞬たりとも気は抜けない。事実、1週間前に金沢大学ワンダーホーゲル部の学生が下りの難所であるカニの横這いで浮き石を踏み滑落。死亡している。明日は山頂で一杯などと呑気には出来ない。その分、今日のはのんびりである。

## 9.2

8月の夏山最盛期には1畳に2人ずつ詰め込まれる部屋もシーズンオフでは8畳に5人とゆったりペースである。

5時半の朝食時に東の空を眺めるが太陽は見えず、雲の切れ目からのぞく橙色に染まっ

た空が今日一日の天候を暗示していた。昨日、別山頂上で宴会を開始する時、真上の太陽に大きな日暈がかかっており天候が崩れだす前兆を感じたのである。今日一日だけでもいいから雨は降らないで欲しいと思う。

劔岳は奈良時代に修業僧により開山された。以後、平安時代より明治40年に陸軍参謀本部陸地測量部の柴崎測量官が長次郎谷雪溪を登りつめて登頂するまでの約1000年というものの閉ざされた山であった。立山信仰において劔岳は「魔の山」「針の山」として決して登ってはならない山であった。また、たとえ登ろうと思っても「針の山」の名が示す如く、切り立った岩峰群のため登れない山でもあった。

現在、劔岳には一般登山道として別山尾根ルートと早月尾根ルートの2本が、熟達者登山道として北方稜線ルートが設定されている。一般ルートが設定されているとはいえ、劔岳は山頂を目指す登山者にとって最も厳しい山であることに変わりはない。私達は今回、別山尾根ルートから劔岳山頂を目指した。

6時、劔山荘を出発。一服劔へ向けての登山道を歩き始める。本格的な登りだ。劔沢側の右斜面には明るい紫色の花をつけたトリカブトが群生する。岩礫のトレイルを30分程登ると一服劔に到着する。劔沢山荘も劔山荘もだいぶ遠ざかってしまった。

一休憩の後、前劔に向かうが、一度コルまで下って這松の中をジグザグと大岩を目指す。初めての鎖場が大岩の左側を通過する時に現れた。通過は大岩が被さる筒状の凹地を上を抜ける形になる。浮石が多い。注意しなければならない。左に回り込むと稜線に出、程無く前劔へと到着する。

前劔からの眺めは圧巻である。前方にはこれから目指す岩の固まり劔岳本峰がどっしりと構え、その本峰より左に早月尾根が伸び、先は富山市街地から富山湾、能登半島までが遠望できる。右には源次郎尾根が劔沢へと落ちており、雪溪もまだ名残りをとどめている。源次郎尾根の遠く向こうに五竜岳や鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳が望め、後方を振り返れば三方を険しい山々に囲まれた別山平が見下ろされ、幾筋ものトレイルが手に取るように分かる。宴会をした別山の向こうには立山本峰の頂上が見え、今日も雄山神社の神主は東方遙拝をしているのだろうと思う。更に右に目を転ずると雄大な薬師岳の稜線が望める。空は薄い雲に覆われ、風がとても強い。うっとり景色に見とれているが、これからがいよいよ劔岳登山の核心部に入るのだ。

前劔を越えるや間もなく小岩峰にぶつかる。20mほどの鎖を利用しながら岩壁をトラバースして左に回り込むがかなりの高度感がある。落ちればただではすまないだろう。続いて岩盤の溝を頼りにコルへ降りつく。稜線を歩いているのだが左側の東大谷側はスッパリ切れ落ちている。ずーっと覗き込んでいると頭がくらぐらし、谷底へ引きずり込まれるのではないかと、思わず背筋に冷たいものが走る。

平蔵ノ頭の手前で道は2分しており、左側の東大谷側の巻道が登山道なのだが右側に入ってしまう。危うく絶壁上で立ち往生するところであった。危ない。危ない。

次々と現れる鎖場を通過し、いよいよ最後の難関であるカニの立這いにやって来た。劔岳にはカニが2匹いる。登山者の岩壁にピッタリ貼り付いての行動をカニに例えたわけだが、登り専門に立這いルート。下り専門に横這いルートが設定されている。私達は先行する3人パーティーがいたので、これ幸いにどのようなコースを辿るのか見ることにし小休止に入る。なるほど、あそこから回り込むのだなとコースを頭に入れて岩壁を40m程直

上する。最初は足場や手掛かりがあるため比較的楽である。しかし、残り10m程は岩に埋め込まれたボルトと鎖を頼りに腕力でよじ登り、登り切ったら右にトラバースする。いやはやなんとも世界である。ここを過ぎれば後はゆっくり頂上へ歩を進めるだけである。

2998mの劔岳頂上からの眺望は前劔にもましてすばらしかった。文字通り前をさえぎるものはなにもない。ぐるっと360度の大展望である。12.3人の登山者が頂上にいたが皆、ただただ感嘆するのみであった。

柴崎測量官がただひとつ残されていた空白地帯であった劔岳周辺の地形図作成のために筆舌しがたい労苦の果てに登りつめた長次郎谷雪渓もすぐ足元に見える。その雪渓をピッケル操作も巧みにゴジラの背中のような形をした八峰に向かって登攀中の登山者が確認出来る。

30分程のんびりと心いくまで劔岳山頂からの展望を堪能した後、下山にとりかかる。下りもカニの横這いを始めとして鎖や梯子が次々に現れたが、11時には劔山荘に戻り劔岳登頂を祝い缶ビールで乾杯する。誰一人としてケガもせずに戻れたことが嬉しい。下山途中の前劔頂上から振り返った本峰頂上はすでにガスがかかり、天候は確実に悪化している。

昼食後、宿泊予定を劔沢から室堂平に移す事にし、別山乗越を越える。雷鳥荘にリュックを降ろしゆっくりと温泉に浸かりながら、今日一日の行動を振り返り感慨に耽る。

その日の夜半から降りだした雨は風を伴い、翌日は酷いものであった。どの山への登山でもそうだが一番影響を与えるのは天候と体調である。体調は個人の節制によりベストに持っていけるが、天候のみは自然まかせである。その天候をどう読み、どう行動するかが問われてくる。今回の山行は全てがうまくいった。帰りの列車で飲むビールの味もひときわ美味かったのである。

92.9.5. 記